

時潮の波の

(昭和二十一年寮歌)

渋谷富業君 作歌
寺井幸夫君 作曲

序

厳きびしかる道みちに仕つかへて
限かぎりある玉緒たまのお惜おしむ
げにさあれ深ふかき因縁えにしの
魂たまゆるる生命いのちの饗宴うたげ
汲くまざらめや残のこの月つきに
旅たびの朝あさ早くは明あけぬ

二

孤窓こそうに流ながる星屑ほしづに
無辺むへんの調律訪しらべへば
測はかりも知らに底そこつひゆ
言ことの葉洩はもれて伏ふし祈いのる
奇あやしく貴たかき生命いのちをば
友情ななを讃たたふ歌声うたこえの
溶とけ行ゆく方かたに馳はするかな

四

宿命さだめの道みちを行ゆく身みにも
友ともを誇ほこらん花筵はなむしろ
銀燭ぎんしやく頬涙ほなみを照あらす宵よい
沈黙しじまに語かたる歡喜よろこびよ
心こころを交かわひ思おもひ酌しやくみ
団欒だんらんにふるふ共鳴ともなりは
胸むねの小琴をこを掻かき鳴ならす

結

近ちかきかな榆陵をかを去さる日ひは
還かえり来こぬ足跡あとか愛かなしみて
ひたぶると打笑うちえむ時ときぞ
求もとめつつ得うべからざりし
秀達うのはしき真理まことの道みちは
はろかなり我等われらが前途ゆくて
進すすまざらめや

三

朽葉くはゆらぎて湧わき出いづる
楡にれの林はやしの真清水ましみずに
己おのれを責せめて泣なく友ともの
孤杖こちやうを運はこぶ逍遙さうようや
遠とおき誓ちかひの日ひを偲しのび
虚おなしき春はるに嘯うたげば
淡あわれし影かげの寂寥さびしうよ

五

北斗頭ほくとずしやう上に影かげ冴さえて
神秘くしひの息いきに吹ふかれつつ
肩組かたくみ歌うたふ旅たびの子こを
染そむる伝統でんとうの篝火かがりびよ
暮くるるに早はやき青春はるの日ひの
追懷おもひを込こむる此この盃つぎを
汲くまん今宵こよいの記念祭きねんさい